

[11] 東白杵地区小体連 (学校数13校 児童数1,176人)

研究部のあゆみ

1 研究主題・副題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための
資質・能力の基礎を育む体育科学習
～児童一人一人の思考力・判断力・表現力等を養う授業の創造と展開～

2 主題設定の理由

本地区においては、児童数の減少に伴い少人数学級が多く編成されている。そのため、児童一人一人の運動能力や経験の差が大きく、運動が得意な児童と苦手な児童との間で活動量や達成感に差が生じやすい現状がある。また、学校間や学年間の交流の機会が限られていることから、仲間と協力して課題を解決する経験が十分に確保されていない。一方で、ICT環境の整備が進み、タブレット端末や学習支援アプリケーションを活用した授業が可能となりつつある。これにより、児童が自らの動きを客観的に振り返ったり、仲間と意見を交換したりする充実した学習活動の展開が期待できる。さらに、学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」が重視されていることから、体育科においても技能の習得にとどまらず、思考力・判断力・表現力を育成する授業づくりが求められている。

以上の現状を踏まえ、本研究では「思考力・判断力・表現力を育む体育授業」を主題に設定した。これは、運動が苦手な児童も安心して参加できる場を保障するとともに、得意な児童には挑戦的な課題を与え、互いに学び合う姿を引き出すことを目的としている。また、ICTを効果的に活用し、振り返りや話し合いを通して児童が主体的に課題を見つけ、仲間と協力して解決する力を育むことをねらいとしている。

3 研究目標

児童に運動の楽しさを実感させ、児童一人一人が思考力・判断力・表現力等を育むことができる授業改善の工夫をすることで、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方を究明する。

4 研究の仮説

話し合い活動や自他の動きを分析したり、自己目標の設定や言語化・動作化する取組を行ったりするなど、思考力・判断力・表現力を養う工夫をすることで、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の基礎を育むことができるであろう。

5 研究の内容

『児童一人一人の思考力・判断力・表現力等を養う授業の創造と展開』
(1) 思考力を育む工夫 (2) 判断力を育む工夫 (3) 表現力を育む工夫

6 研究の実際

領域	単元名	学年	授業者
ボール運動	ネット型「ソフトバレーボール」	6年	門川町立五十鈴小学校 川崎 剛

- (1) 思考力・判断力・表現力等を養うための手立て
それぞれのチームの課題を客観的に見付けるために、チームで課題を出し合ったり、ボールを受ける順番を児童同士で決めさせたりしながら行った。運動が得意な児童が苦手な児童へやり方やコツを伝え合う姿が見られた。
練習段階で、ラリーが何回続いたのかを競わせることで、勝敗にこだわりすぎず活動を楽しむ姿も見られた。



【ラリーの様子】

- (2) 成果と課題
- チーム作りを工夫することで、運動が苦手な児童も安心して活動に取り組むことができた。
 - 運動が苦手な児童もルールを簡易にしたことで、楽しむ姿が見られた。

- 試合形式での勝敗ではなく、「ラリーが続いた数」や「ペアでトスが続いた数」などで競わせたことで、ボール運動が苦手な児童も楽しく活動に参加する姿が見られた。
- 指導者が、運動が苦手な児童へ意識がいき、得意な児童への運動量の確保が十分でなかった。
- 改善点や作戦を話し合うことができていたが、ゲームに夢中になり忘れてしまう児童がいた。
- ゲーム中にも、自分たちの課題を意識させる工夫や声かけが必要だった。

領域	単元名	学年	授業者
ボール運動	ネット型「ソフトバレーボール」	5・6年	諸塚村立諸塚小学校 甲斐 聡

(1) 思考力・判断力・表現力等を養うための手立て

児童が思考しながら運動をするためには、各種運動の基本的な動きが安定して自然に行えるようになることが大切である。しかし、体育の限られた時間でその領域まで実施することは不可能である。そこで、少人数であることを活かして十分に時間をかけてボールに慣れ親しませたり、ルールを簡素化したりすることで、思考しながらプレーすることができるようにした。

- サーブを優しく投げ入れて拾いやすくしたり、2回目のパスをキャッチしたりすることで思考しながら活動できるようにした。【資料1】
- ジグソー法を試験的に実施し、児童が使命感をもって話し合いに臨めるようにした。
- 体や手の動き、ボールを持たない時の動き等、児童の気付きを掲示資料に書き込んでいき、各種プレーで意識しながらプレーできるようにした。【資料2】
- 本時の振り返りや次時への課題をワークシートに記録させ、自分たちに合った作戦作りや練習に活かすようにした。

(2) ICTの効果的な活用

- 児童同士で、膝や手の形を撮影し合う等ICTを効果的に活用することで、児童が自身のプレーを振り返ったり、進んで話し合ったりできるようにした。【資料3】
- 作戦カードをロイロノートで配布し、話し合いに活用する。

(3) 成果と課題

- ソフトバレーボールに十分に親しませたり、ルールを簡素化したりすることで、児童に思考しながらプレーする余裕が生まれ、チームメイトを気遣った動きをしたり、考えて打ったりできるようになった。
- ICTで自身の動きを振り返らせることで、児童が自身のプレーを振り返ることができた。また、児童同士が話し合う場にもなり、思考力や表現力を高める場になった。
- めあてやルールの整備が不十分なことがあり、十分な振り返りができないことがあった。児童が本時のねらいに迫れるような授業計画に努めたい。



【資料1】



【資料2】



【資料3】

領域	単元名	学年	授業者
ボール運動	ゴール型「タグラグビー」	第1・2・3・5学年	不土野小学校 河野 要世

(1) 思考力を養うための工夫

児童の思考力を養うためには、目的に合う解決策を考えるだけでなく、視覚的に状況を捉える工夫が必要である。

そこで、本研究ではペアでの作戦タイムの時間を2つの場面で設定した。1つ目は、前時の課題や反省を振り返り、一度実践をした後の場面。2つ目は、作戦を取り入れた実践の後の場面。

また、作戦タイムではロイロノートの作戦ボードを利用し、相手や味方の動きを視覚的に捉えながら思考した。

(2) 判断力を養うための工夫

判断力を養うためには、自己選択の場が必要である。

そこで、作戦を成功させるためにどのような練習がチームに必要なのかをペアで話し合い、自分たちで練習内容を選択する場を設定した。項目は、「A パス」「B タグの取り方」「C 動き方」の3つとした。作戦を成功させるために選択した練習の時間は、5分間とした。自己選択で複数の項目にチェックを入れる場合は、優先順位を示し取舍選択の判断力を養えるようにした。

(3) 表現力を養うための工夫

表現力を養うためには、考えたことを表現する身体表現と言語化の2つの場面が必要である。

身体表現の場は、作戦を成功させるための練習や対戦の場で設定した。言語化の場は、ペアで話し合うだけでなく、作戦を文章で記し感想や振り返りを記入する場を設定した。雰囲気や成り行きで動くのではなく、明確な意図をもった動きへとつながった。

(4) 研究の成果(○)と課題(●)

- タブレットを利用しながら作戦の話合いや振り返りをすることで、より深い思考へとつながり、意欲的に学習に取り組むことができた。
- 課題や反省を振り返り、自分達で練習内容の選択をすることで、様々な状況に応じた適切な判断をする力が身に付いてきた。
- 学習の過程を記録として残すことができたため、前時の課題や反省を踏まえた作戦を考えることができ、回数を重ねるごとに状況に応じた動きができるようになってきた。
- 作戦の幅が狭い場面があったため、作戦例を複数提示する必要がある。
- 基礎的な練習の中での思考力・判断力・表現力を育む手立てが少なかった。

(5) まとめ

思考力・判断力・表現力を育めるように、話し合いの手段を工夫した実践をすることで、ICTの効果的な活用場面や児童の学習意欲の向上を図ることができた。一方で、少人数での指導において、より高い教育効果をもたらす指導法については、さらに研究の余地がある。

領域	単元名	学年	授業者
ボール運動	ネット型「ソフトバレーボール」	第3・4学年	西郷義務教育学校 黒木 智仁

(1) 主体的に運動に関わらせるための手立て

- ① 個々の能力や経験の差が大きいため、全体のめあてと別に、個人のめあての設定をさせた。
- ② 授業者と児童でルールの内容等を話し合うことで、全員が参加しやすいルールにした。

(2) 対話的な活動を充実させるための手立て

- ① 自分や友達の姿をタブレットで撮影させ、アドバイスの時間に活用させることで、対話の活性化を図った。
- ② 固定のチームではなく、毎時間違うメンバーでのチーム編制をすることで、いろいろな友達と対話できるようにした。

(3) 深い学びにつなげるための手立て

- ① 全体指導で授業者が動きのポイントを言語化することで、児童がポイントを意識して練習や試合に取り組めるようにした。
- ② 毎時間、児童に学んだことや課題を記録させることで、学びを振り返り、次時の学習につなげることができるようにした。

(4) 成果と課題

- 個人の目標を設定することで、自分の課題を意識して練習したり、練習内容を選択したりする姿が見られた。
- 静止画や動画を見ることで、サーブやレシーブのポイントを確認しながら自分の課題を振り返って修正したり、友達にアドバイスをしたりする姿が見られた。
- 毎時間、学んだことや課題を記録しておくことで、前時の課題を意識しためあてを立てる姿が見られた。
- ルールの変更を行ったことで、児童が変更前のプレーをする場面があり、混乱が見られた。
- 毎時間違うメンバーでの編成をしたことで、普段話をしていない友達とのチームになると、なかなか対話ができない姿が見られた。

7 まとめ

今年度も、東白杵地区授業研究会は各学校で行う形となった。各校の今年度の研究を通して、「思考力・判断力・表現力を育む体育授業」には、ルールの工夫・ICT活用・話し合い活動の充実が有効であることが確認できた。特に、児童が主体的に課題を見つけ、仲間と協力して解決する姿が多く見られたことは大きな成果だと言える。

一方で、得意な児童への挑戦機会の保障、作戦の幅の拡大、ゲーム中の意識付けなど、今後改善すべき課題も明らかになった。次年度は、これらの課題を踏まえ、さらに教育効果を高める授業づくりを目指していく。